



コンパスが指すところ

ちっぽけなNPOだったとしても、やはりここに触れないわけにはいかない…。

その理由は、教育は未来の社会を想起することなしには成り立たない営みだから。…それが矜持。

大国アメリカのトランプ大統領の一挙手一投足が注目されている。相次ぐ大統領令の乱発(?)に、喝采をしたり、異議を唱えたり…。何が正しいのか、アメリカがどこへ向かうのか、全くわからない。しかし、はっきりしている事実は、いかに多くの問題をアメリカ社会が内包していたのかということが、混乱を通しながらもしっかりと伝わって来ることだ。今まで私たちが、曖昧な中に理解していた多くの考えなければならない問題が、目の前に深刻な問題として浮上してきているといってもよいのかもしれない。しかも、これらの「深刻な問題」は、大国アメリカだけの問題でないことは誰もが気づいている。富の集中と格差、経済活動での恩恵を受けるために移動する多くの移民達。自国から安全を求めて他国へ逃れる難民の群れ。マイノリティへの抑圧と人種差別。世界だって、そして日本だって同じではないのか。「ラストベルト」と「シャッター通り」は、産業や経済構造の変化の中で、忘れられ捨てられていく地域として、共通項で括ることが出来るのではないだろうか。政治、経済、産業が大都市へますます集中することによって、地方は切り捨てられ、置き去りになってしまったのではないだろうか。歴史という事実さえ、何度塗り替えられることになるのだろうか。ヘイトスピーチを、なぜ明らかに「差別だ」と為政者は弾劾しないのだろうか。これらは私たちの「深刻な問題」なのに違いない。

トランプ大統領はまた言う、「自由貿易を否定し、アメリカに雇用を取り戻す」と…。一見、冷戦以降のグローバル資本主義経済の流れを否定し、時間を巻き戻すかのように思われているが、どうだろう?確かにグローバル資本主義経済は世界を飲み込み、無節操な利益収奪競争を繰り返し、「分配」の理念はいつも簡単に踏みにじられた。消費こそが「発展」の原動力となるよう構築された経済システムによって、人間は「生産」「労働」に関わる存在としてよりも、「消費する者」として社会に位置付くようになった。規律と意欲ある消費こそが我々に課せられた責任でさえあるかのようだ。そして、すでにこうしたグローバル資本主義経済の限界が見え始め、「異議を唱え」始める声が大きくなっているのも事実だ。トランプ支持者の声もこのことに相違してはいないだろう。

しかし、ここで気をつけなければならないのは、トランプ大統領も、ポピュリズムと今呼ばれている各国の右傾化した勢力も、人を扇動する目的で「利益」や「もうけ」を語っているだけだということだ。「おまえ達は損している。損をさせているのは移民や他国だ」というわけだ。よく見れば、トランプ系(?)の人々も、非トランプ系(?)の人々も、結局はグローバル資本主義経済の延長線上にいる。そこでは限りない拡大と発展こそが、人間社会の目的であるように語られ続けているのだ。

コンパスが別の針路を指し示すことはないのだろうか。

日本人の年齢中央値46, 9歳! 年間出生人数はすでに100万人を割り、40年後には50万人を

